

高知県における遍路道の 空間構成と整備指針に関する考察

1110359 山崎 隆信

高知工科大学 工学部 社会システム工学科

遍路道は、歩き遍路にはなくてはならないものである。しかし、現在の遍路道には一般国道や主要地方道といった自動車道が重なってしまったことで、四国の自然を感じながら歩くといったこともなくなり、歩き遍路を行う巡礼者は1メートルにも満たない歩道を通る極めて危険なものとなっている。またこのような道では折りの気持ち、信仰の気持ちを持って歩くのに不適切である。本研究は現在の遍路道の調査を行い、空間構成を把握することでこれからの遍路道をいかに残すか、そして、遍路道をより魅力的な空間にするための指針を示すことを目的としている。

キーワード：四国遍路、遍路道、空間構成、地域風景、自然の中の道

1 はじめに

1-1 背景

遍路道は僧の修行の増加とともに、四国巡礼が確立されるに従って通る道が固定化されてきたが、明治以降近代化が進み、第二次世界大戦後には車社会化とともに大きな道路整備が行われ、かつての面影をほとんど失わせるほど遍路道を変貌させた。歩き遍路から車遍路、バス遍路といった自動車を利用した遍路が増え、修行としての遍路より観光としての遍路が増えたことで遍路のあり方が大きく変わってきた。

最近では、遍路道を少しでも残し、より良いものにしようと遍路道の整備や復元、道標の表示、遍路石の建立を行い、巡礼者が休憩するための遍路小屋なども建てられている。また、四国八十八ヶ所霊場と遍路道を世界文化遺産に登録しようという動きも見られる。

そういう動きの中で高知県の遍路道の現地調査を行い、現況を把握することで遍路道の価値と可能性を見出す。

1-2 目的

地図調査と現地調査から、遍路道の空間構成を明らかにし、整備指針を提案することを目的とする。

2 研究概要

2-1 研究内容与方法

今回は身近な地域の遍路道の空間構成を明確にするため、研究対象地区を28番札所大日寺から36番札所青龍寺に絞った。香南市にある28番札所大日寺を出発点とし、高知市内に点在する四国霊場を通して土佐市にある36番札所青龍寺を終着点とするルートである。

・遍路道の空間的変遷

地図調査を基本とし、明治30年地図、昭和40年地図、平成22年地図を用いて空間的変遷を分析する。

・遍路道の空間構成

今回の調査では、徒歩での現地調査を基本とし、調査が行いやすいよう札所ごとに遍路を区切る「区切り打ち」を行い、「順打ち」「逆打ち」の両方を用いて調査を行う。道の構成、周辺施設、特色、問題を把握する。

・遍路道の整備指針

空間構成で明らかになった魅力、問題点から、現在行われている遍路道整備から整備指針を提案する。

3 遍路道の空間的変遷

車社会化の進展とともに道路整備が行われ、遍路道も大きく変化していった。国道、県道、市町村道、農道、林道、里道などに分けられ、道路は大きく拡張されてより自動車が走りやすいようたくさんのコンクリートが用いられた。



図 1-1 香美市と香南市を繋ぐ渡り舟（明治）

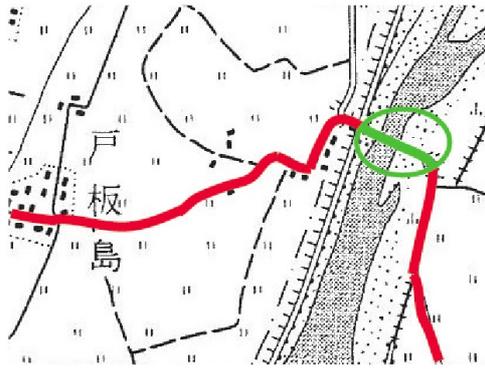


図 1-2 香美市と香南市を繋ぐ戸板島橋 (昭和)



図 1-3 香美市と香南市を繋ぐ戸板島橋 (平成)

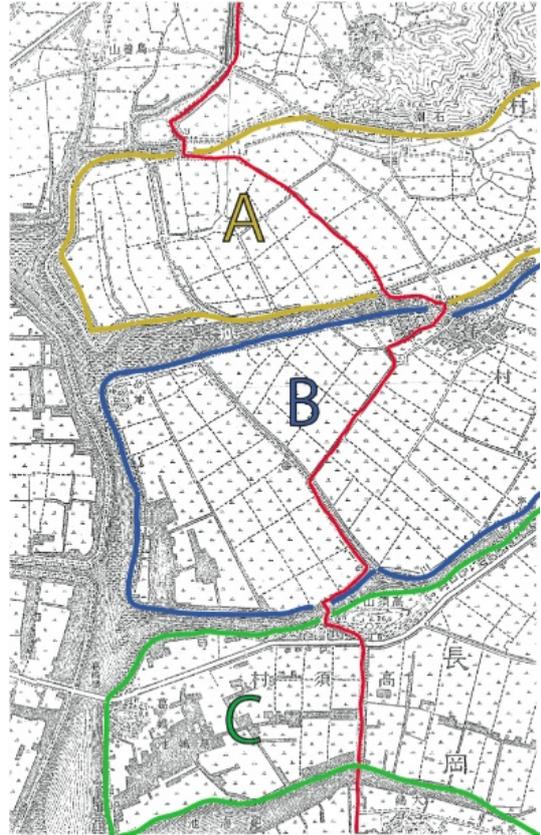


図 1-4 30～31 番札所間の遍路道 (明治)

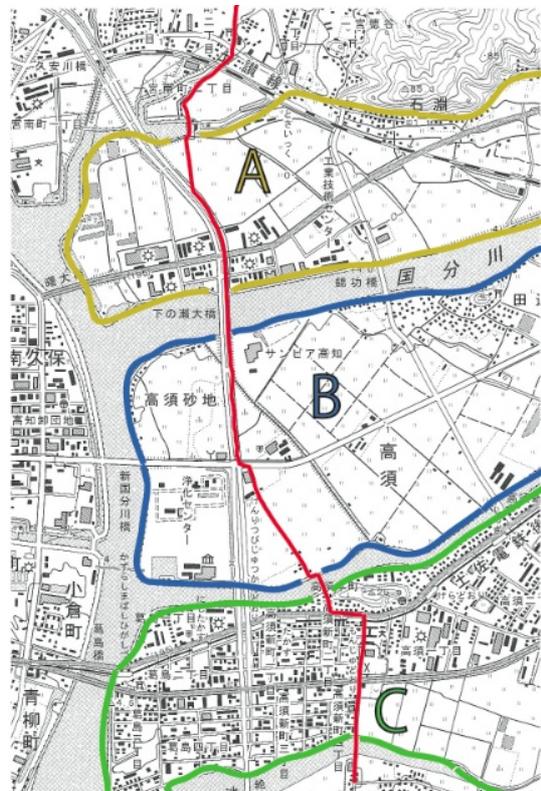


図 1-5 30～31 番札所間の遍路道 (平成)

図 1-1、図 1-2、図 1-3 は 28 番札所大日寺から 29 番札所国分寺までの香美市と香南市の地図である。図 1-1 は香美市と香南市を行き来するために渡り船が使われていた年代の地図である。渡り舟は集落の人々だけでなく遍路をする人たちにも利用されていた。しかし、香美市と香南市を結ぶ橋梁が生まれ、香美市土佐山田町の発展と自動車の普及で道路整備が行われたことで、土佐山田町から香南市を通る一本化された大きな道路がつけられた。

図 1-4、図 1-5 は 30 番札所善楽寺から 31 番札所竹林寺までの高知市の地図である。明治の地図と昭和の地図は大きな変容は見られなかったが、平成の地図と比べるとまったく異なった町並みとなっている。A 地区から B 地区は遍路道、C 地区は町並みが大きくことなっている。A 地区への入りは同じ道であるが、B 地区を通り C 地区に入るまでに明治の道は大きく迂回して田圃道を通らなくてはならない。それに対して平成の地図は主要地方道ができたため、迂回しなくても B 地区、C 地区まで一本の道で行けるようになった。

このように現在の遍路道の多くは都市の発展と道路整備により大きく変容している。

4 遍路道の空間構成

4-1 道の構成

遍路道の構成を把握するため道路の幅員や使用目的などから3つに分類した。

- ・幹線道：一般国道、一般県道、主要地方道、市町村道
- ・一般道：市町村道、路地
- ・自然道：路地、農道、田圃道、山道

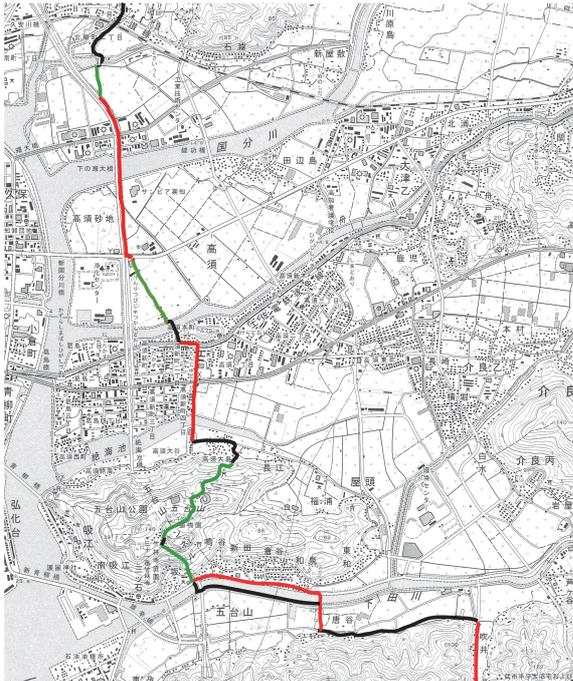


図 2-1 30 番札所竹林寺周辺地図（平成）

幹線道は国道や県道などの主要な道路とした。道路整備が進んでいる国道や県道は歩行者用の道も整備されているため移動しやすい（図 2-2）。



図 2-2 29～30 番札所間の国道

一般道は主に地区関係者が通ることを考慮された道である。

自然道は山道や農道、田圃道で当時からのすばらしい景観をそのまま残す数少ないものであり、歴史的にも重要なものである（図 2-3）。



図 2-3 35～36 番札所間の山道

4-2 周辺施設

神社・寺院、祠、道標、地域性のある施設、遍路小屋

遍路道特有の施設として祠があげられる。場所によっては1キロメートルの間に10個ほどの祠が分布していた（図 3-1）。



図 3-1 34～35 番札所間 祠

生活の一部として河川にある洗い物をする際に使われていたと思われる外壁から飛び出た RC 板（図 3-2）。また集落内には良心市も多く見られた。



図 3-2 33～34 番札所間 洗濯場としての RC 板



図 3-3 周辺施設分布図

4-3 魅力・問題



図 4-1 山道から見える海

高知の遍路道の魅力として周りの自然の景色の良さがあげられる。これは高知の遍路道が海側の一般道や山道を通っていることにある（図 4-1）。また、歴史的な地域性のある施設（祠、良心市など）に触れることができるのも魅力としてあげられる。

問題としてあげられるのは、遍路道を車の通れる道に整備されたことで自然を感じるができなくなったことである。そして歩行者が通る十分な幅がなくなり車の通りが多いため常に危険と隣合わせになっている。こういう危険のある場所が高知県の遍路道ではいくつか見られる（図 4-2）。



図 4-2 28～29 番札所間の主要地方道

5 遍路道の整備指針

5-1 整備指針

- ・道路の緑化
国道や県道に樹木、街路に街路樹などを設置し景観の改善を図る。
- ・田圃道や山道を通る細い遍路道の保全と道路整備
歴史ある田圃道や山道に手を加えない。道路の劣化に伴う危険性のある道路の整備。
- ・休憩施設の設置
遍路小屋など休憩施設を道中に設置。



図 5-1 35～36 番札所間にある遍路小屋

6 まとめ

遍路道の価値は美しい歴史ある景観である。遍路道の美しい景観を後世に残していくために、遍路道の周辺に住む人たちに遍路道の重要性を認識してもらった上で、初めて遍路道を保存、復元することができる。これからは遍路道の価値を四国全体で再認識していくことが重要である。

～参考文献～

- 1、空海の史跡を尋ねて
四国遍路ひとり歩き同行二人
著者 宮崎建樹
発行所 へんろみち保存協力会
- 2、現代の四国遍路 道の社会学の視点から
編著者 長田政一、坂田正顕、関三雄
発行人 田中千津子
- 3、へんろ道を迎る
執筆 小松勝記
発行 毎日新聞 高知支局
- 4、四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクト
<http://uta.rgr.jp/henro/hennro.html>